

「アメリカの本音はどこに?」  
日米交渉が難航する度に、総理官邸から電話が入りこぎ尋ねられた。だが「アメリカの本音は」と問われても答えようがない。多民族の人工国家アメリカは想像を超える複雑な存在なのである。同様にアメリカと日本の関係を描いた良書と求められても答えに窮してしまう。今日的なトピックスを扱った著作は数多く出版されているが、たちまち千からびてしまうものが多い。それなら水面下に隠れた巨大な氷山の構造に光を当てた書を薦めてみたい。「20世紀の古典」として読み継がれる外交の名著の筆頭は、ヘンリー・A・キッシンジャー著『外交(上・下)』だろう。キッシンジャーは、上下1200頁に及ぶこの大著でアメリカ外交が相反する2つの潮流を内に抱え込んでいると指摘している。アメリカという国は、燦然と丘の上に輝く民主主義を至高のものとし、権力政治にまみれた旧世界から孤立していたと考えた。同時にアメリカ流の民主主義を圧政に苦しむ国々に広めたいという情熱にも突き動か

# 水面下の巨大な氷山の構造に光を当てた名著

りゅういち  
龍一  
てしま  
嶋手

(外交ジャーナリスト・作家)



## 『外交(上・下)』

ヘンリー・A・キッシンジャー著  
日本経済新聞出版社 各26957円



## 『ベスト&ブライテスト(上・中・下)』

デイヴィッド・ハルバースタム著  
二玄社、各1785円



## 『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』

若泉敬著 文藝春秋、1890円



されてきたのである。

アメリカがかつて国際連盟への加盟を拒み、今日でも国際連合の影響下に組み込まれることを嫌うのは前者のDNAなのだろう。その一方で、ベトナムやイラクの地にアメリカ流の民主主義を移植しようと果てしなき戦争に駆り立てられてしまう。これは後者のDNAなのである。『外交』では20世紀の覇者となったアメリカ外交のこうした特質が余すところなく描き出されている。日米関係に直接触れた記述は多くないが、日米同盟の素顔はすっきりとスケッチされている。

ベトナムでの戦いが理念の戦争でなく、植民地争奪戦だったなら、戦いはあれほど凄惨なものにはならなかったろう。だがアメリカは自由主義陣営の盟主として退くわけにはいかなかった。アメリカがこのアジアの熱戦に足をからめ捕られていく様を描いた壮大なノンフィクションが、デイヴィッド・ハルバースタム著『ベスト&ブライテスト(上・中・下)』だ。若きケネディ大統領のもとに馳せ参じた「最良にして最も聡明

な」人々がなぜ、あれほどの愚行に突き進んでいったのか。超大国の権力中枢で練り広げられた人間たちのドラマを乾いた文体でつづった記念碑的作品である。このアジアの戦争の傍らで経済大国への階段を駆け上がっていく日本のありようを行间から読み取ってほしいと思う。

ベトナム戦争を遂行するアメリカの軍部は、極東の要塞、沖縄を返還することに消極的だった。だが国際政治学者若泉敬は、当時の佐藤栄作首相の密命を帯びて、キッシンジャー補佐官とひとり交渉した。そして軍部を納得させるためにも、有事の沖縄への核再持ち込みの密約を取りまとめ、ついに沖縄返還に道を開いたのだった。そうした日米極秘交渉のすべてを明らかにした書が、若泉敬著『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』だった。いま日米両国政府は移設交渉で隘路に入り込んでしまっているが、基地問題の本質を考えるためにも手にとってほしい1冊である。密約に手を染めた結果責任をとって自裁する覚悟で書かれたこの書の行間には烈しい志が滲んでいる。